

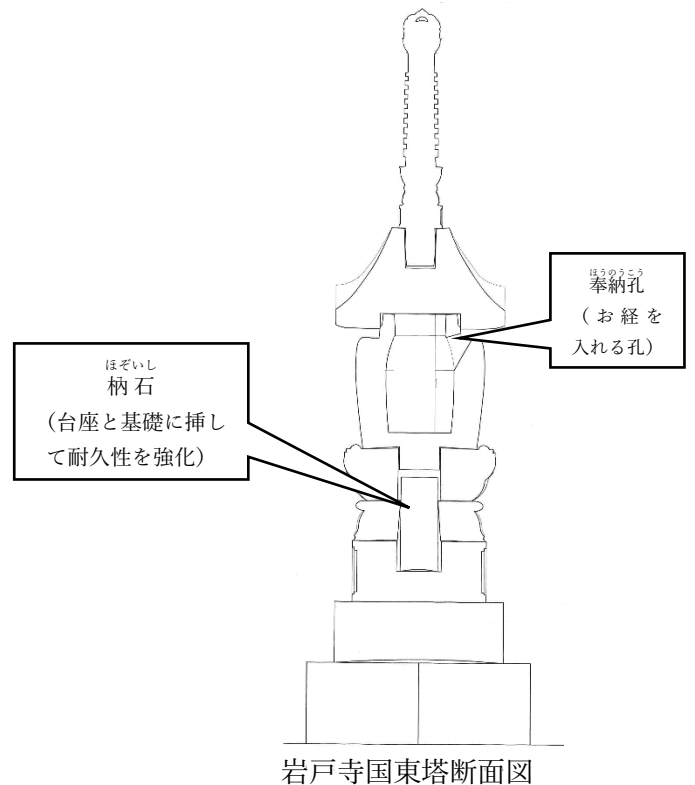
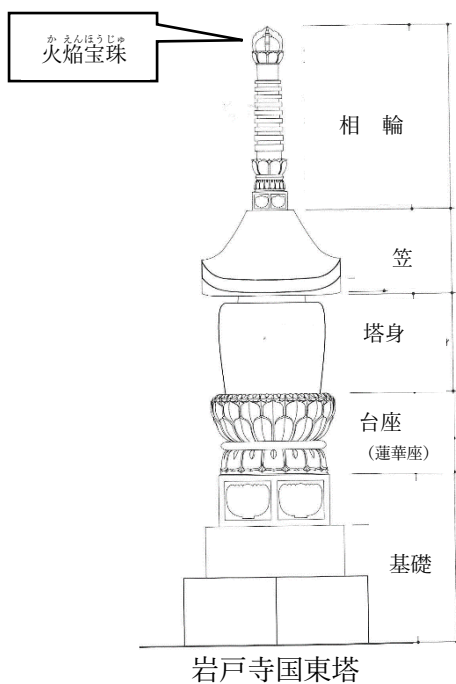
くにさきとう 国東塔

くにしていじゅうようゆうけいぶん かざい
(国指定 重 要有形文化財)

写真^{いわた}は国東町岩戸寺^{いわた}の岩戸寺境内にある国東塔です。

塔身に刻まれている銘^{こうあん}から弘安^{こうあん}6（1283）年9月に、仏法興隆^{ぶつぽうこうりゅう}（仏教の勢いが盛んになること）の祈願のために建^{こんりゅう}立されたことがわかります。現在、銘文のある国東塔で最古のものといわれており、国東塔の起源を考える上で非常に貴重な国東塔です。

また、この塔身内部には鉄器3点（工具^{のみ}の鑿）と当時の人髪が納められていました。



<国東塔>

国東半島^{げんせりやく}を中心に分布する石塔で、人々の現世利益^{こっかあんたい}や仏法の繁栄、国家安泰^{こっかあんたい}を願い、お経を納めることを目的として造られ始め、次第に死者の冥福を祈る追善供養^{ついぜんくよう}や生前に死後の冥福を祈るための供養塔として造られるようになっていきました。

特徴としては、塔身をのせる蓮華^{れんげ}の台座^{れんげざ}（蓮華座）があり、塔身を空洞にし、奉納孔^{ほうのうこう}をもち、また、塔の先端^{ほうじゅ}の宝珠が炎に囲まれたデザインになっています。

せんぷく じ ぶつでん 泉福寺仏殿

くに し ていじゅうようぶん か ざい
(国指定 重 要文化財)

国東町^{よこて}横手の泉福寺の仏殿です。

鎌倉時代の初めに中国から日本に^{ぜんしゅう}禅宗がもたらされ、その頃に伝えられた^{ぜん}禅宗様（唐様）と呼ばれている建築様式で建てられています。

^{だいえい}大永4（1524）年に建てられ、室町時代まで^{さかのぼ}遡る本格的な禅宗様式であり、九州最古の仏殿です。その後も大修理が行われましたが、創建当時の建築様式を継承しており、大変重要な木造建造物です。

仏殿の奥に^{ずし}厨子（県指定有形文化財）が^{しゅみだん}須弥壇の上に安置されています。

< 泉福寺 >

禅宗の^{そうとうしゅう}曹洞宗の寺院。泉福寺は^{えいわ}永和元（1375）年に^{たわらうじよし}田原氏能の母、^{むでん に こう}無伝仁公の^{ほつがん}発願で、^{む ちゃく みょうゆうぜん じ}無著 妙融禅師によって開山された寺院で、九州の曹洞宗の大本山です。

あしかがたかうじ ざ ぞう 足利尊氏坐像

くに して いじゅうようぶん か ざい
(国指定 重要文化財)

国東町安国寺の安国寺（^{あんこく じ} 禅宗 ^{ぜんしゅう} の ^{りんざいしゅう} 臨済宗 の寺院）に安置されている ^{ひのき} 桧 で造られた ^{ぞうこう} 像高 94.5 cm の木像で、足利尊氏像と伝えられています。南北朝時代（1332～1392 年）に作られた像で、足利尊氏の彫刻としては最も古いものといわれています。

この像は京都の ^{ひがしいわくらでら} 東岩蔵寺 から ^{やましな} 山科 の ^{じ ぞう じ} 地蔵寺 へと移され、その後、明治 40（1907）年に国東市の安国寺に移されました。

<安国寺>

安国寺は足利尊氏が南北朝の内乱等による戦没者の ^{ついぜん く しょう} 追善供養 のために日本全国 66ヶ国 2島に 68ヶ所の安国寺の ^{こんりゅう} 建立 を ^{ほつがん} 発願 して建立されたお寺です。国東市国東町安国寺にある安国寺は、^{かんのう} 観応元（1394）年に 68ヶ所の中で一番最後に豊後国に建立されたものです。

あんこく じ しゅうらく い せき 安国寺 集 落 遺 跡

く に し て い し せ き
(国指定史跡)

国東町安国寺にある安国寺集落遺跡は、今からおよそ1800年前の弥生時代終わりごろのムラ（農耕集落）の跡です。

発掘調査の結果、建物の跡や建築部材、土器、石器、木製の農耕具などが多く出土しました。その他、焼けた米（炭化米）なども発見されていることから、稲作を行っていた農耕集落だったことがわかりました。

また、土器の口の部分が「く」の字の形をし、その部分に波型の文様（櫛描波状紋）がぐるっと刻まれているタイプの土器が多く出土しました。この土器は「安国寺式土器」と名付けられ、東九州地域を中心に弥生時代の終わり頃に使われていました。

そしてクリやヤマモモなどの多くの植物の種子も出土しており、公園には当時の建物の高床建物や植物などがあり、当時の環境を復元した公園となっています。

み うらばいえんきゅうたく 三浦梅園 旧 宅

くにしていし せき
(国指定史跡)

安岐町^{とみきよ}富清にある三浦梅園の自宅です。

安永^{あんえい}4（1775）年の江戸時代に書かれた旧宅の設計図が残されています。

これは建築当初の図面であり、梅園が53歳の時に、自ら大工の棟梁^{とうりょう}と相談しながら建てたのではないかと考えられています。

旧宅は茅葺^{かやぶ}きの建物で建築後230年以上が経過し、傷みが著しかったため、平成14年から19年にかけて解体修理を行いました。その結果、建物は軒廻りに変更がある以外は建築当初の姿から改築の少ないことがわかりました。

また、三浦梅園の家は祖父の代から医者であり、旧宅には薬部屋などもあります。

み うらばいえん <三浦梅園>

享保^{きょうほう}8（1723）年、富永^{とみなが}（現、安岐町富清）の地で生まれた江戸時代中期の哲学者です。幼いころから宇宙に強い関心を持ち、天地自然を考察してその中から哲学的真理を導き出しました。53歳の時『玄語^{げんご}』8巻を完稿し、その応用編ともいえる『贅語^{ぜいご}』『敢語^{かんご}』など多くの著作を完成させました。

そして寛政元^{かんせい}（1789）年、67歳で病気のため亡くなりました。

三浦梅園という呼び名は本人が用いたものではありません。正式には「三浦^{みうら}晋^{すすむ}」または「三浦安貞^{みうらあんてい}」という名前を用いました。また、「梅園」は屋敷のあった場所の呼び名、そこに作られた私塾の名前でした。そこから親しみと敬意を込めて「梅園先生」という呼び名が生まれたのだと推察されます。

三浦梅園は帆足万里^{ほ あしばん り}・広瀬淡窓^{ひろ せ たんそう}と共に、「豊後三賢^{ぶん ご さんけん}」と呼ばれている大分県を代表する偉大な哲学者です。

み うらばいえん い こう 三浦梅園遺稿

くに して いじゅうようぶん か ざい
(国指定 重 要文化財)

三浦梅園が残した書物で、現在、国東市安岐町^{とみきよ}富清にある三浦梅園資料館に収蔵されています。

梅園は少年の頃から人々が「当たり前」としてきた自然の現象に疑問を持ち、「なぜ目が見て、耳が聞き、日は東から出て西に入り、石を放せば地に落ちるのか」など独学で疑問を解き明かそうと努力しました。

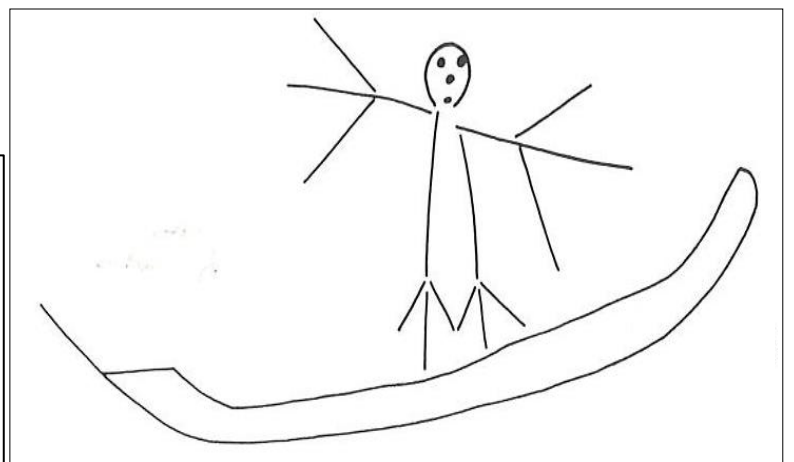
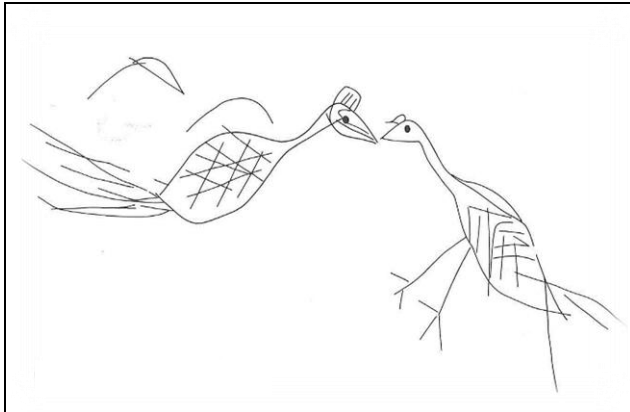
そしてついに「^{じょうり がく}条理学」といわれる学問を作り上げ、「^{ばいえんさん ご}梅園三語」といわれる『^{げん ご}玄語』『^{ぜい ご}贅語』『^{かん ご}敢語』やそのほか多くの書物を著しました。その分野は哲学・科学・政治経済学・教育学・文学・医学・天文地理学・歴史学・仏教学など幅広い分野に及び、人々の暮らしから宇宙までさまざまなことを追究した記録です。

おにづか こ ふん 鬼塚古墳

くにしていし せき
(国指定史跡)

国見町^{たけ た づ}竹田津の河口右岸の^{きゅうりょう}丘陵の上にあり、国東半島の北端に位置し、姫島や四国の島々、山口県沿岸部まで望むことができる場所に立地しています。

この鬼塚古墳は11基から成る西山古墳群の中の1つの古墳です。埋葬された人は地域の支配者層と考えられています。6世紀末頃に築造された^{えんぶん}円墳で、周囲に^{ばていけい}馬蹄形の^{しゅうこう}周溝を巡らしています。また、九州でも数少ない^{せんこくへき}線刻壁画を持つ古墳で、古墳内部の壁には「樹木」「木の葉」「船に乗った人」「鳥」などが線で彫られて描かれています。



もんじゅ や ば 文殊耶馬

くにしていめいしょう
(国指定名勝)

国東町大恩寺^{だいおんじ}にある文殊耶馬は、文殊仙寺とウラジロガシを中心とする自然林と火山性の奇岩^{きがん}から構成されている景勝地（景色が優れている土地や場所）です。

現在、文殊仙寺には県指定有形文化財の「文殊仙寺境内図」^{もんじゅせんじけいだいず}が残されており、この絵図は江戸時代中期（1706～1707年）に描かれたと推定されています。この絵図には境内だけでなく、周囲の奇岩^{きがん}や樹木なども詳細に描かれていて、約300年前の絵図の世界がそのまま文殊耶馬として今日に伝えられていることがわかります。

また、江戸時代の国東の偉人である三浦梅園もこの文殊耶馬を題材として「眉^{まゆ}の山集^{やましゅう}」という句集に序文を残しています。三浦梅園が見た頃とほぼ同じ景色の文殊耶馬を現在の私たちも見ることができるのです。

しげみつ け じゅうたくしゅおく
重光家 住 宅主屋

くにとうろくゆうけいぶん か ざい
(国登録有形文化財)

国見町向田^{むかた}にある個人の住宅の一部で、現在も住人の方が生活されています。

この主屋は木造平屋建^{ひらやだて}、入母屋造^{いりもやづくり}の主体部の南西部から土間玄関・帳場^{ちょうば}を南方に突出させ、入母屋破風^{はふ}を重ねた重厚な構えをとっていて、北西隅の台所には明かり取りを兼ねた特徴ある宝形^{ほうぎょう}屋根を載せている瓦葺^{かわらぶき}の家屋で、昭和7（1932）年に建てられました。

この主屋の設計は国会議事堂を設計したことでも有名な国東町岩戸寺^{いわとじ}出身の吉武東里^{よしたけとうり}の手によるものです。

くに み か ぶ き 国見歌舞伎

くにさきし し てい む けいみんぞくぶん か ざい
(国東市指定無形民俗文化財)

200年ほど前の江戸時代中期に杵築藩の藩主が地元を視察に訪れた際、地元の若者が演じたのが起源とも、また、杵築藩にあった「播磨屋座」が国東半島一元を巡回興行していたともいわれています。当時から農村の娯楽文化として親しまれてきた「地芸芝居」です。

国見歌舞伎は明治に入って盛んになり、昭和になると青年団を中心に継承していましたが、高齢化や指導者不足で幾度かの中断を繰り返していました。

現在では、「地芸芝居」を行っている地域は九州でも数少なくなってきています。

また、国見歌舞伎は幾度かの中断の後、平成5（1993）年に国見町田舎歌舞伎愛好会を結成し、地元の祭りの「国見ちよるちよる祭り」で旗揚げ公演をして以来、全国各地の晴れ舞台で活躍しています。また、それと同時に伊美小学校（現在は統合されて国見小学校）では、総合学習の授業で保存会から指導を受けて、学習発表会や国見町文化芸能発表会、高齢者とのふれあい交流会などで「白波五人男」などの演目を上演しています。